

安岡章太郎 思想音痴の発想

芳賀書店



安岡章太郎

思想音痴の発想

芳賀書店

思想音痴の発想

著者

安岡章太郎

著者との了解により検印廃止

発行者

芳賀章

発行所

株式会社芳賀書店

東京都千代田区神田神保町二―七

電話二六一―八七二八・四一一二 振替東京四二五〇三

定価

六八〇円

印刷

昭和四十一年五月十五日

発行

昭和四十一年五月二十日

印刷

八光印刷

装幀

肥島庸二

目次

I 日本人とは一体何だろう？

11 ■ 世界の中で宙ぶらりんな日本

大国に生れたものは、よかれあしかれ大国民であり、小国からきたものは小国民の運命を背負う？

28 ■ 丸山真男氏の「タコソボ文化」説と糞尿処理問題

東京のように近所と近所というような有形無形のコミュニケーションがなくなっても民主主義は育つだろうか？

37 ■ ライシャワー氏の努力と限界

老練な交通巡査のようなライシャワー氏のアザヤカサも時によると何とも食い足りなく思えてくる

43 ■ 主義主張から離れた不可思議な派閥意識

主流派はやがて反主流派を生み、反主流派は反反主流派の一派に分れる可能性を常にもつ

48 ■ 衆参両院を料亭に移すべし

議事堂を、爆撃しなかったり新紙幣の図案に使ったりしたあたりから、アメリカは日本人の心を汲み違えていたらしい

53 ■ 「オモチャの兵隊」式「オモチャの国会」

われわれにとって「個人的な苦情」を離れて政府に対しどんなナマの声があげられるのだろうか

65 國道徳教育は一体何を教えればいいのか？

「応用のきく価値判断」とは、うっかりすると「道徳を抜きにした価値判断」になるのではないか？

75 ■「ボクは若い…」とは何と老人じみた言葉だろう

安全な「非行」でラクに暮らしてゆこうとするのが、われわれの一般的傾向なのだろうか？

82 ■夕暮れどきの「お寺の鐘」の恐ろしさと「家」のこわさ

女房がこわいのはそれが「家」に居着いているからこわいのであって、女房そのものがこわいのではない

91 ■精神文化の全般で僕らは「後進国」でさえもない？

新劇の問題に限らず結局、われわれは、異質の人種として異質の文化を背負ったまま、永久にサル芝居を続けるのであろうか

100 ■「愛される文部省」の必要はなくなったのに…

芸術祭は「文化国家」の大混乱をわれわれにハッキリ印象づけるための象徴的行事であつたのだが……

105 ■豊かな自然と貧弱な人工

われわれの観光はアメリカ人のそれとは質的に違っているようだ。例えば「お花見」的としか言いようがないような……

II 思想音痴の擬装

115 ■「三十二シテ」立たず「何ものでもない」人間となる

恐ろしい夢は正夢だった。三十歳の正月を私は進駐軍労務者として接収家屋の使用人部屋で迎えたのであったが……

122 ■私が文士になったのは「落第生である私」から逃げ出すためだった

そのころ古びた予備校の帽子をかぶって歩いていた私は、もう一人の「私」であり、他に本当の「私」が存在すると二六時中空想していた……

130 ■そのころ私はあらゆる思想らしい思想を嫌っていた

敗戦直後、思想は私の内部の混乱をひきずったまま、勇ましげに私の外側を渦巻いていた……

136 ■殺人の本当の意味は動機よりも殺後の「空漠さ」にある

そして小説家の仕事は一人の間を「死」にまで追いつめてゆくことの本当の意味をつかんだ上で始まる

141 ■戦後の社会情勢を予言的に反映している言葉『父を売る子』

『父を売る子』という余りにその内容を端的に表わしている言葉思い出すと、何ともいえない無力感を覚えるのだった……

144 ■「自分の文章」を語るのには自分の顔について語るようなものだ

私の文章を作ったものは、幼児以来の「東京弁」に対する劣等感とそのアコガレかもしれない

147 ■「思想性がある人」とは何と奇妙な言葉だろう

「考えぶかい人」といつてはなぜいけないのか。そのほうが立派な人物を想像できるような気がするが……

158 ■ 「兵器係上等兵」のイラダチ

文学とは、あくまでもどこかで「プロヴィンシアル」なものにつながっているのではないか？

166 ■ 「居直る根性」をやしなうべし

バカバカしいほど深刻そうな「被害者意識」が、今や日本全土にはびこっているようだ……

171 ■ 直言居士と被直言居士

われわれは誰かに絶えず悲痛な声でドナられていないと生き甲斐を感じられないのかもしれない

178 ■ 心の底に頭上一発の原爆を待望する気持がないとはいえない

原爆の恐怖をわれわれは日常茶飯の事に妙なくあいに語りすぎているのではないか？

184 ■ 僕らの生活からは生活らしさが消え失せてしまっている？

僕らに必要なのは、「生活」そのものをもっと考え、「生活」そのものを自分の手に握りしめることだ

191 ■ どこか似ている写真作家の運命と現代人の運命

写真家の意欲は「今日」とともに揺れ、諸事象を際限もなく「過去」に交え続け、やがて自らも過去の中に消えてゆく。

それが写真作家の運命だ

201 ■ 勘定高い人・卑怯な人は必ず恋愛から逃げたがる

そして今日、知らず知らずの間に多くの人が余りに勘定高く、
余りに卑屈になっている

207 ■ 女がいちばん美しいとき

群青の海で揺れている一対の夫婦の乗った一艘の舟が象徴し
ているような女の美しさと、やさしさ……

Ⅲ そこに住んでいる人々は結局、われわれと大同小異だった

225 ■ 暑くて寒くてバカでかい国

日本人が「アメリカ的」というのは、どれも「カリフォルニア
的」とか「西部的」とかいふべきだ

232 ■ アメリカ人も日本人も大同小異——それが最も新鮮な感動だった

「家族制度」や「嫁いびり」が、スラム街や日本と同じ農家が、クミ
トリ式便所さえもアメリカにはあった！

236 ■ ミシシッピーになぜ血は流れたか

「黒人問題」を理解するには、ぜひとも南部全体が北部のドレイ
になってしまったという南部の現状を知らねばならない

245 ■ 英雄に祭り上げられた一人のインディアンの悲劇

有色人種への偏見をもたぬという白人でも無意識のうちに何

かしら有色人種への優越感をもっている？

248 ■ アメリカ人の悲劇的事態を警告する言葉 “DO IT YOURSELF”

生活の安定した上品なアメリカ人がヒマをもて余し日曜大工する後姿には身の毛のヨグツような絶望が控えている？

258 ■ アメリカでは誰でも「白権派的」理想主義を掲げられる、それに反し：

アメリカの作家は日本の作家に比べて「独立心」をもっているというが：私は日本文壇を弁護する

IV 対談

267 ■ いいだ・もも氏と語る

泥は近代文明も兵器ものみこんでしまうのではないか？

289 ■ 大江健三郎氏と語る

われわれはなぜ書くか？

336 ■ あとがき

1

日本人とは
一体何だろ
う？

われわれは戦勝国だったのだろうか？ — 外人ホステスのいる店にて



世界の中で宙ぶらりんな日本

● 大國に生れたものは、よかれあしかれ大國民であり、小國から来たものは小國民の運命を背負う？

羨ましい後進國の留學生

外國へ行って「日の丸」の旗を見るとナミダが出るといふ。私には、そんな経験はなかった。ただ、半年ほどアメリカ南部に滞在して、帰りがけハワイにより、ワイキキアン・ホテルとかいうところへ泊ったとき、日系人のマネージャーが、ハダシで床のゾウキン掛けをやっている白人のボーイを叱りつけているのを見て、何となく愉快であった。南部のナッシュヴィルでは、ちょっと想像のできない場面だったからだ。

個人の家は別として、公園、学校、劇場、議會、教会、ホテル、料理店等、公共の場所で箒やゾウキンをもって働かされているのはすべて有色人種である、という觀念を私はもたされていた。アメリカ

カへ着いてはじめてサンフランシスコの空港の便所で、黒人が棒ゾウキンで便器の掃除をやっているのを見たときから、ナッシュヴィルでも、メンフィスでも、セントルイスでも、ニューオーリアンズでも、白人の集まる場所で見かける黒人は必ずバケツと棒ゾウキンを持たされているようであった。

だからハワイで、とにかく有色人種である日系人が立ちほだかつて、床に四つん這いになった白人をドナリつけているのを見たときは、黒白逆に焼きつけられた写真を見せられたような驚きと、だんだん日本に近づきつつあるという帰り旅の安らぎみたいなものを感じた。

勿論、日系人はアメリカ人であって日本人ではない。しかしアメリカの国内で見ると、やはり日本人だとしか考えられなかった。ナッシュヴィルの大学に日系市民の教授がいた。二世か三世かわからない。私と会っても日本語はまったく使わなかったが、ある時パーティで、その人の奥さんから、

「子供が学校へ行くと、『おまえのお父さんもお母さんも日本人だろう、だからおまえも日本人だ』といわれる。いくら『わたしたちはアメリカ人だし、おまえもアメリカ人だ』と言ってきかせても、子供たちは学校では『日本人だ』といわれてしまう」

という話をきいた。この場合「日本人」というのは低いものだという意識で語られるのである。ただ学校や劇場でバケツやゾウキンを持たされるというほどではないけれど。

ナッシュヴィルは南部の学園都市といわれるだけあって、外国人の留学生がたくさんいた。イギリスやフランスから勉強にきているという学生のこととは聞かなかったが、チェッコスロヴァキアやイスラエルからきた学生には紹介された。彼等は最初、私の眼に普通のアメリカ人と見別けがつかなかったが、会って話してみると、何となく「小国民」という感じがした。圧倒的に多く眼についたのは韓

国からの留学生だった。何でも韓国の文部省がこの土地の師範大学と契約をむすんでいて、毎年五十人の校長さんや文部事務官がその大学で集合教育をうけているということだった。それらの校長先生や役人たちは帰国して、韓国の子供たちにアメリカ流の教育をほどこすわけであろう。

その他、インドや、インドネシアや、タイや、フィリッピンや、台湾や、琉球や、ありとあらゆるところから数えきれないほどたくさんの留学生があつまっていた。彼等の大半は大金持の子弟か、選りぬきの秀才かであって、母国にかえればそれぞれ必要な地位が約束されているらしかった。

私はそのうちの何人かと知り合いになり、アパートへ食事によんだりしたが、みんなどこか肩肘ばったようなところがあり、なかなか頑張っているのだなという気がした。なかでもインド人の張り切りようはスサマじく、会話の途中でインドとインドの文化の讚美されないことはないと言ってよかった。彼等の誇りは要約すると、イギリス式の礼儀作法と東洋の精神文化とを併せ持った自分たちは世界で一番すぐれた民族だということらしかった。しかし、すくなくともその中の一人は、どういうものか自分の使ったあとの便器に絶対に水を流そうとしないというので、女房がいつも顔をしかめた。私の家の便所は使いにくいのかとも思ったが、彼等のアパートをたずねると、部屋中にカレー粉と香料と糞便の入り混った濃密な空気がたれこめ、眼までがヒリヒリと痛みだすほどであった。

しかし私は、ある意味で彼等が羨ましかった。とにかく彼等にとってアメリカはまちがいに先進国であり、ここで学んだことをもって母国へかえれば必ず役に立つ。タイ国の女子学生もインドの医学生も、彼等の専攻課程が何だろうと、なれない風土のもとで苦勞して身につけたことが、きっと何等かの実をむすぶ。ところが私たち日本人にとっては、どうだろう。

私は日本をたつとき、ナッシュヴィルは日本人が一人もない町だときかされていた。だが到着早々、ホテルでM電機の技師に出会った。彼等は電気関係の機械を買いつけに二人づれでやってきて、二日ほど滞在するということだった。

「あんたみたいな人が、こんなところへ何をしに来たんですか」

と彼等は私の顔を、げんそうに眺めて言った。けれども私にしてみれば、日本の代表的電気機具メーカーが、こんな田舎町に技術を買いに来ているということが不可思議であった。

大学へ行くと、そこにも二人、日本人学生の名前が登録されていた。私を入れて三人である。三月ほどしてから東大の医学部から研究員として来た人をいれると四人になった。ところでナッシュヴィルには大小、十幾つかの大学があり、私もそのうち五つほどの大学を訪問したが、どこへ行っても「うちにも日本からきた学生がいる」と言われた。黒人大学にさえ日本人の教授が一人、学生が二人いるということだった。つまり、日本人が一人もないといわれているこの町に、わかっているだけでも二十人以上の日本人が住んでおり、そのほとんどが学者か学生であるわけだ。しかし、このうち何人がここで学んだことを日本で役立てられるだろうかと思うと、正直のところはなほだ疑問におもわれた。

彼等の大多数はアルバイト学生である。つまり学ぶことよりも、食うことを先にしなければならぬ人たちだ。そのためには周囲との違和感を克服することが大きな問題になってくる。だから、なかには何とかしてアメリカの市民権をとることだけを目標にがんばる留学生もでてくる。彼等をみてみると、まるで終戦直後の「日本」が、そのままテネシーの山奥に凍結されているような気もした。戦